

な

ご

み

っ

う

し

ん

発行日：平成 27 年 3 月 23 日（第 3 号）

発 行：島田療育センターはちおうじ

「会話」とは「会って話すこと」。では、会話に必要なのは言葉なのでしょうか。これは、「会話」に本当に必要なものを教えてくれた物語です。

所長 小沢 浩

### 「飛行機」

島田療育センターはちおうじでは、毎年独立行政法人国際協力機構（JICA）の見学を受け入れている。

「療育」とは東京大学整形外科教授の故高木憲次が提唱したものであり、医療だけでなく教育・福祉など生活全般を考えていくという、日本独自の概念である。「Ryōiku」を世界に伝えることは国際交流として大切なことである。

その中で、自閉症、難聴の長男を持つお母さんが体験談を話してくれた。J君は、生まれた時から反応が少なく、お母さんは気になっていた。でも健診では様子を見ましようと言われ、そのままにしていた。3歳の時に異常を指摘され、島田療育センターを受診した。そして、言葉のないJ君に言語療法が始まった。最初にみた言語療法は、パズルをしたり、サインランゲージを覚えたり、言葉を教えることを全くしていなかった。

「なんでこれが言葉を教える訓練なのか」と言語聴覚士に食ってかかったこともあった。でも、一生懸命サインランゲージを覚え、J君に教えた。お母さんにはそれしかできなかった。ある時、岡山まで飛行機に

乗ったときのことであった。J君は、飛行機を見て、親指と小指を立てて、ゆっくり手を横に動かした。飛行機だ！J君は飛行機を表現したのであった。お母さんはそのとき初めて気づいた。「この子、会話しているんだ」と。と同時に、今までJ君が伝えようとしてもお母さんが理解できなかったこと、パニックをおこし自分の頭を床にたたきつけていたことを思い出した。言語聴覚士さんが伝えていたことはこれだったんだと、そのとき初めて気づいたと語ってくれた。涙とともに…。更に印象的だったのは、モルジブの新生児科医とのやりとりであった。モルジブの医師は「モルジブの新生児が障害をもった時、母親は責められる。何故あなたはそんなに前向きでいられるのか？」と質問してきた。そのときにお母さんは、少し考えたのち、一言だけ、しかしはっきりとした口調で答えた。

「すべてを受け入れることです。」  
子どもを変えるのではなく、子どもを受け入れること。

この一言がすべてを物語っていた。

（奇跡がくれた宝物 小沢浩著、  
クリエイツかもがわ より）